

不登校 ～ 初 期 ～

不登校の子どもとのかかわり方について

〈 支援の基本的な姿勢 〉

- ・ 不登校の子どもを「怠けている」と批判的にみるのではなく、自分の課題をこれから乗り越えていく存在として尊重し、現状をそのまま受け入れる。
- ・ 子どもを、自分のことを考える力のある一人の人として尊重する。
- ・ 「この先生はわかってくれている」「頼りになる」と思ってもらえるよう信頼関係を構築する。
- ・ 子どもと一緒に遊んだり、関心のあることを話したり、子どもが自由で安心していられるよう努める。
- ・ 不登校という状態の解消だけを目指すのではなく、自尊感情を育み、子どもが心理的にエネルギーを蓄え元気になることによって、不登校という状態を抜けて社会的に自立することを旨とする。

〈 留意点 〉

- ・ 学級担任（ホームルーム担任）一人で抱え込まずに、本人や保護者を支える「柱」を増やす。学校教育相談コーディネーターや経験豊富な教員及びＳＣなどの専門家を交えたチーム支援や、適応指導教室や学習補充ができる特別教室、教育センター、各種専門相談機関などはそれぞれが一つの「柱」である。
- ・ リストカットや抜毛、ピアスの穴をたくさんあけるなど自傷行為が激しい子ども、あるいは被害妄想、不眠、摂食障害などが著しい子どもの場合は、保護者との連携の上、専門機関とも連携する。
- ・ 本人が抱えている問題が一つの要因となって、友人や教員との人間関係を混乱させている場合、その当該問題の解決を図る。

家庭訪問について

- ・ 連続した欠席や『体調不良』等の気になる欠席理由の際は、電話連絡にとどめず家庭訪問を行い、直接出会って話すことを大切にする。
- ・ 家庭訪問は、必ず早いうちに行う。訪問開始しばらくは本人に会えなくても構わない。教員が無理に登校させようとしていないこと、本人のペースを大切にすることというを理解してもらう。
- ・ この時点での励まし、説教などは、軽い事例を除いて、ほとんど効果がないので、慎重に行う。
- ・ 不登校の理由や自分の気持ちを語ることが難しい子どもも多いため、尋ねたことに答え

られない場合は、無理に問い詰めず、本人の興味・関心があることなど、本人が話しやすい話題を大切にします。

<家庭訪問のポイント>

- ・子どもや保護者との信頼関係を築くことをめざす。
- ・保護者の悩みを、相手の立場にたってしっかりと聴く。
- ・家庭訪問をする際には必ず事前に連絡する。
- ・家庭訪問をしたあとも、必ず保護者に連絡し、本人の様子を尋ねる。
(教員に会ったときに明るく話していても、あとで保護者に「なぜ先生を家に入れた」と暴れている場合もあるので、影響を確認することが不可欠。)
- ・初回の家庭訪問は原則として長くても1時間までにとどめる。
- ・本人と会えなくても保護者とは連絡を保つ。学校は待っているよというメッセージを伝える。
- ・長期欠席者でも、配布物や行事予定(特に運動会、修学旅行、文化祭、卒業アルバムの写真撮影など)の連絡は欠かさない。

保護者とのかかわり方について

- ・支援者として一定の心理的距離をしっかりと保ちつつ、保護者の気持ちを受け止め、最後まで教員と一緒に考えるという姿勢を伝える。
- ・保護者がなぜそういう行動をとらざるを得ないのかという背景の理解に努める。自分にはわからないと思ったら、専門家と連携する。
- ・保護者に、必要な情報を伝える。学級担任(ホームルーム担任)が中心となって支援するが、SCや教育相談機関なども利用可能であることを伝え、保護者や本人に選択してもらう。
- ・専門機関を選択した場合には、綿密な連携を図る。

不登校の子どもの情報の共有について

- ・気になる子どもの情報を学級担任(ホームルーム担任)、教科担当、部活動顧問、友人、養護教諭、保護者などから集め、不登校の初期段階での情報を教職員で共有する。
- ・共有した情報をもとに学級担任(ホームルーム担任)・学年主任・養護教諭・SC・学校教育相談コーディネーター・人権教育推進(児童生徒支援)教員などが、どのように連携していくのかを考え、支援へとつなげる。

不登校 ～ 中期 ～

不登校の子どもとのかかわり方について

- ・子どもの良いところを見つける。
- ・教員という立場に頼らず、一人の大人として子どもと接する。
- ・子どもが自分自身でいられ、安心できる自由な雰囲気を作り、その中で対話する。
- ・「あの子はこういう性格の子ども」と決めつけず、その子の新たな一面を発見できるように深くかかわる。かかわりが浅いと、新たな面は見えてこない。
- ・対人不信感が強い子どもは、教員を怒らせ嫌われるような行動を無意識に行う。それとできるだけ巻き込まれることなく、根気強く受け止め、子どもと向かい合う。
- ・不安感の強い子どもは、何かができることを褒められるだけではかえってしらけることもあるため、その子の存在そのものを肯定する態度が不可欠である。
- ・非行など行動化の激しい子どもは、しっかりと話を聴き、行動ではなく言葉で人に訴えられるようになることを目標にする。
- ・子どもとまず信頼関係を築き、その中で子どもと向かい合う。信頼されていない状態での一方的な指導は、事態を悪化させることに留意する。
- ・教員もかかわりの中で、真に自分が問われるという認識をもち、しっかり考える。

子どもたちは、言葉に出さなくても、自信を失い、人への不信感を募らせ、無力感を感じていることが多い。中には、やる気をなくし、怒りや欲求不満に翻弄されて自己破壊的かつ他者破壊的になっている子どももいる。再び人への一定の信頼を取り戻し、自尊感情を育み、自分に自信がもてるようにかかわることを目指す。

家庭訪問について

- ・登校していないことで、友人や教員との関係が疎遠になることに不安を感じる子どもも多いので、定期的な家庭訪問を続ける。子どもの状況や変化を把握することで、学校復帰のための支援が可能となる。また、不安で揺れ動く保護者を支えることは、大切である。子どもの日々の生活ぶりを丁寧に聴き、小さな変化を見つけ、その変化をともに喜び、変化してきた本人の力を肯定することが本人の自信につながる。

<家庭訪問のポイント>

- ・長期欠席が続いている場合は、特に学校が待っているというメッセージをさりげなく伝えるために、家庭訪問を継続して行う。
- ・子どもと会えない場合には手紙やメッセージも有効である。
- ・引き続き、子どもや保護者との信頼関係の維持・形成に努める。

- ・相手の気持ちになって話を聴くことを続ける。
- ・良い変化が見られた場合、それをともに喜び、教員と一緒にこの過程を歩んでくれているという安心感を提供する。
- ・家族間の葛藤や、友人関係の葛藤の間に教員が立たされ、双方の異なる言い分を聞くこともあるが、どちらかに傾くことなく、中立であることに努める。
- ・保護者や本人の未熟な部分が見えても、それによって相手を全否定するのではなく、そういう部分と同時に成熟した部分ももっていることを念頭において話を聴く。

保護者とのかかわり方について

- ・保護者を責めたり、否定したりしない。
- ・学校に対する不信や不満を否定せずに聴き、誠実な対応を心がける。
- ・保護者の焦りや自責の念や無力感、子どもへの怒り等をしっかりと聴いて受け止めることを大切にする。
- ・保護者自身、子どものことやかかわり方がわからずに混乱していることが多いため、子どもへの見立てを共有したり、かかわり方を一緒に考えることで、新たな見方を提供し、落ちつきを取り戻せるよう努める。
- ・思春期の不登校の場合、親離れや子離れといった親子関係の変化が生じてくることが多いので、その点から、子どもが何を訴えようとしているのか、それに親がどのように対応しているのかといった観点から事情を理解し、親離れ・子離れがうまく進展するように支持的にかかわる。
- ・保護者の養育能力に著しい問題がみられる場合は、関係機関と速やかに連絡をとる。

関係機関とのかかわりについて

- ・不登校支援の中心になる学校教育相談コーディネーターはもちろん、各学級担任（ホームルーム担任）も、ふだんから、地域の教育相談機関や医療機関、適応指導教室・特別教室・学科指導教室、さらにはこども家庭相談センター、精神保健福祉センター、民間施設やNPO等がどのような立場で、どのような役割をしているのかを把握しておく。
- ・相談機関にかかっている場合、学級担任（ホームルーム担任）は、相談機関の担当者と連絡を取り、守秘義務に差し障らない範囲で見立てなどを聞き、事情への理解をさらに深める。

校内の相談体制について

- ・対応方針が決まったら、学級担任（ホームルーム担任）が一人で抱え込まないように、複数でチームを立ち上げ、子どもの状況をよく見極めながら支援していく。また、S C や医療機関・保護者などと連携し援助を行う。

不登校 ～ 回復期 ～

回復期のサイン

- ・規則正しい生活を送り始める。
 - ・身だしなみを気にしたり、部屋の掃除や机の整理をし始める。
 - ・学校の様子を気にし始める。
 - ・自分から学校の話を出すようになる。
 - ・家族との会話が増え、家の手伝いをし始める。
 - ・外出が増えたり、友だちと連絡を取ろうとする。
- ◎こんな様子が見られるようになれば、登校に向けての働きかけを少しずつ行ってみる。

不登校の子どもとのかかわり方について

- ・子どもの不安な気持ちを理解し、頑張りすぎないように配慮する。
- ・子どものペースを大切にすることを一層心がける。
- ・子どもの自己決定を大切にするとともに、できることから徐々に取り組めるようにする。
- ・復帰直後の子どもの友人関係を把握し、うまくいかなかった場合には、まずそのことに対応する。
- ・子どもが登校する場合、髪の毛を染めてきたり、私服であったりとさまざまな揺れ動きが生じる可能性があるが、そうした行動を頭ごなしに否定せず、登校できたことをねぎらいながら、自ら改められるように対話を重ねる。

<家庭訪問のポイント>

- ◎不安の解消に努める。

学習の遅れなどを不安に感じるようであれば、教材等を用意し、できる限り支援をする。

- ◎子どもと一緒に考える。

子どもが無理なく生活できるように具体的な計画をたてる。絶対に無理をさせない。

保護者とのかかわり方について

- ・子どもが復帰できる状態にあるのか、保護者とともによりしっかりと見極めることが大切である。そのために、より綿密に連絡を取り合う必要がある。
- ・子どもの感情も揺れ動くので、保護者が子どものペースを大切にできるよう努める。

不登校の子ども情報の共有について

- ・「学校復帰の兆し」を見逃さないように、長期欠席中であっても保護者との連携は密にする。その上で得た情報をチームで共有し、復帰したとき安心して登校できる体制をつくる。

関係機関とのかかわりについて

- ・今まで支援を受けた関係機関と連携し、復帰に向けて助言をもらう。

校内の相談体制について

- ・ＳＣには、子ども・保護者に定期的にかかわっていただき、徐々に自信を取り戻していけるよう支援してもらう。
- ・学校教育相談コーディネーターは、学級担任（ホームルーム担任）が必要なときにＳＣや関係機関等に相談できるよう情報を提供し、連絡・調整を行う。